

源氏物語と長恨歌 其七

源氏物語と長恨歌

其七

上野 英二

其七 源氏物語と白鳥処女

天女が白鳥の姿で飛び下つて水に浴したことは古記にもある。空より通ふものが鳥類に身を換へるといふのは、誰にも納得し得られる話し方である。
(柳田国男『昔話と文学』)

羽衣説話、天人女房説話と呼ばれる話は、世界的には、白鳥処女説話 (Swan Maiden) と呼ばれる説話に包摂される。高崎正秀「羽衣説話の民俗学的考察」(『古典と民俗学』) は、「天之八女、俱為「白鳥」、自_レ天而降、浴_二於江之南津_一」とあって、柳田の言う「古記」と目される、『帝王編年記』所載の羽衣説話(其五参照)を紹介

介して、

ここまで来て、我々は始めて典型的な白鳥姫伝説に逢着する。それは、Swan-maiden type と呼ばれる説話の体系をほぼ完全に具へてゐる。

ベヤリング・グールド師の『印欧民譚型表』によれば、それは

- 一、男が、呪衣を岸において水浴する美女を見つける。
 - 二、男は女の呪衣を盗み、女はやむを得ず、男のものになる。
 - 三、数年後、女は衣を探し出して逃げ去る。
 - 四、男は再び女を得る道が永遠に絶たれる。
- この四つの契機キイサツを具へてゐる。

と言う。

その骨子は、羽衣説話のそれに殆ど重なるが、特に第三条「衣を探し出して逃げ去る」ときに、女は白鳥の姿になって飛び去って行くのを特徴とする。日本の民話では、「鶴の恩返し」として親しまれる鶴女房がその代表的な例である。

西村真次『神話学概論』によれば、その分布は、「日本」、「朝鮮」、「蒙古」、「シベリア・ロシヤ線」、「北海沿岸」、「地中海沿岸」、「南西亜細亜」、「太平洋中」、「南北両米大陸」など、全世界に及び、「変化の方則に従うて

種々に変化し」、「色々の変形を見るに至つた」。

「地理的、並びに社会的環境で、海岸、湖畔、河辺にあつては白鳥になつてゐるものが、平野では鳩になり、山間では狼になり、海島では海豹になるといふ風に変る。また男性の方は蒙古、ポメラニヤ、ジャワ、ギヤナなどでは獵師になり、三保、スダランドシヤなどの海国では漁夫になり、山間では樵夫になり、原野では牧羊者になつてゐる」。

無論、羽衣説話における天人の羽衣による飛昇もあるいは鶴女房における鶴もまた、白鳥の「色々の変形」の一つである。

特に、竹取説話における女主人公、『竹取物語』の「かくや姫」に当る女性が、しばしば鶯の巢の卵から生まれたとされることは、まさに竹取説話も白鳥処女説話であつたことの、何よりの証左となつていよう。『海道記』に記録された竹取説話では、「焚奕姫」は「鶯姫」とも呼ばれている。⁽¹⁾

昔、採竹翁^{タケトリノオキナ}ト云フ者アリケリ。女ヲ焚奕姫^{ムスメ}ト云フ。翁ガ宅^{イヘ}ノ竹林ニ、鶯ノ卵^{カウゴ}、女形^{ジョウケイ}ニカヘリテ巢ノ中ニアリ。翁養ヒテ子トセリ。

『竹取物語』の「かくや姫」が、始め「いと幼なれば、籠に入れて養ふ」と、「籠」の中で育てられたのも、そのような主人公としての素姓によるものと考えようとする意見もある。「姫を「籠に入れて養ふ」とあるのも、単に翁の商売柄の籠といふ意味でなく、姫の前蹤譚が鳥であつた名残を、この辺に留めてゐるのだと解され

ないこともないわけです」（三谷榮一『学生の為めの竹取物語の鑑賞』）。

したがって、竹取説話の愛好、ひいては羽衣説話の愛好とは、白鳥処女説話が世界的に愛好せられているという観点から考えられるべきことであつた。『長恨歌』の愛好についても同断。『長恨歌』が羽衣説話に則っているとすれば、『長恨歌』もまた、白鳥処女説話の「色々の変形」の一つであつたと見做し得るからである。『長恨歌』の愛好も羽衣説話の愛好も、世界的にはそれは窮極のところ、白鳥処女説話への愛好によるものであつたといふことになる。

一方翻つて、そうした観点をもつて『源氏物語』に臨むならば、白鳥処女説話の「色々の変形」の一つと見得る物語は、まだいくつも見出すことが出来る。

帚木三帖の一つ、夕顔（其六参照）に先立つ空蟬の巻。この物語も、見方によれば白鳥処女説話の「変形」と見ることが十分に可能である。

雨夜の品定め、先輩たちの体験談に刺激された青年光源氏は、とり分け「中の品」の女に興味を抱く。翌日、方違えのために宿つた家は紀伊守の屋敷。そこにはまるで詠えたかのような「中の品」の女性、伊予介の後妻、後に空蟬と呼ばれることになる女君が来合せていた。源氏はこの女性の寢所に忍び入り、契りを交してしまふ。しかし、自らをよくわきまえるこの人は、以後源氏を拒み通す。源氏はその後再び、無理やりその寢所に忍んで行くが、すでにそこは蛻けの殻。

源氏の訪れを逸早く察知した女は、すでに寢所を抜け出していたのだつた。脱ぎ棄てられた「薄衣」が、わずかに残るばかりであつた。「空蟬」の名は、この小桂があたかも蟬の抜殻のようであつたことに因む。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

女が男の元に現れ、一時男のものとなるが、いつか逃げ去って行ってしまう。この展開は、羽衣説話、白鳥処女説話のそれと基本的に共通している。空蟬の物語が、白鳥処女説話の「変形」であるとしたら、脱け殻を残して飛び去って行く蟬、「空蟬」は男の元を飛んで去る、白鳥の「変形」であったことになる。⁽²⁾

「空蟬」が「羽衣」を連想させることは、他ならぬ『源氏物語』自身が証言している。

羽衣の薄きにかはる今日よりは空蟬の世ぞいと悲しき

(幻)

蟬もまた羽搏いて空へ飛び去って行くこと、羽衣説話における天女と変わるところがない。『源氏物語』「空蟬」の形象には、羽衣説話における天女、白鳥処女説話における白鳥に通うところがあると考えられる。⁽³⁾

羽衣を纏って天空の彼方に飛び去る蟬のように、空蟬は源氏から逃れ去った。源氏の手には、脱ぎ棄てられた「薄衣」ばかりが残されたが、それは残念ながら羽衣なのではなかった。羽衣説話ならば、羽衣を奪われたために天女は男の元に留まることを余儀なくされるのであり、羽衣が男の手のうちにある限り、天女は男の妻であり続けた。しかし、空蟬の「薄衣」は、抜け殻であって羽衣ではなかったのである。⁽⁴⁾ 羽衣説話の通例に較べるならば、光源氏の間の悪さが際立つということになるか。空蟬の物語を、羽衣説話、白鳥処女説話の「変形」と見

るとすれば、『源氏物語』にあつてそれは、主人公の男にとって些か分の悪い格好になっている、と言ふべきかも知れない。

その事件からしばらくして、夫伊予介の赴任に従つて下向することとなつた空蟬に、源氏は手元に残しておいたその小桂を返した。それに付けられた源氏の歌。

あふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな

羽衣ならぬ小桂は、いくら手元に止め置いても去り行く女を留めることが出来なかつたのである。

さらに源氏は歌う。

過ぎにしもけふ別る、も二道に行く方知らぬ秋の暮かな

「過ぎにし」夕顔も（其六参照）、「けふ別る、」空蟬も、一時源氏の元に現われはしたものの、結局去つて行つてしまうのである。

夕顔に空蟬、いずれにしても、広く白鳥処女説話の「変形」と見得る物語は、『源氏物語』に案外少なくないということとは、指摘し得るであらう。

「白鳥姫型説話の白鳥はペルシアでは鳩になり、エスキモーでは海鳥に、ギアナでは禿鷹にさへ置きかえられ

る。アイヌでは翡翠カハセミや川鳥カハガラズが代役をとめてゐる」(高崎 前掲書)。『源氏物語』において、蟬がその代役を務めるのも何ら不思議はない。

蟬がよければ、それは「蜻蛉」であつても、差し支へはないはずである。

あやしく、辛かりける契りどもを、つく／＼と思ひ続け眺め給ふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛び違ふを、
「ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへも知らず消えし蜻蛉

あるかなきかの」と、例の、ひとりごち給ふとかや。

宇治十帖、蜻蛉の巻の巻末、浮舟失踪の騒ぎの後の薫の感慨。遠い道を通いつめた大君に先立たれ、次いで思いを寄せた妹中君も匂宮の元に去り、そしてまた、最後に望みを繋いだ末妹浮舟も入水してしまった。「何事につけても、たゞかのゆかりをぞ思ひ出で給ひける」。宇治八宮家の姉妹達にことごとく去られてしまった薫には、むなしく昔を顧る他になすすべは無かった。薫は一首の歌を詠じて、去つて行つた姫君達を偲んだ。「ゆくへも知らず消えし蜻蛉」とは、直接的には浮舟を喩えたものであるが、「あやしく辛かりける契りども」とあり、「見ればまた」とある以上、そこには大君も中君も重ねられているに違いない。本文にも、蜻蛉は一匹ではなく、数匹が「飛び違ふ」と描かれていた。

この「蜻蛉」が、白鳥処女説話における白鳥に当ることは、言を俟たないであろう。「あるかなきかの」と言われる如く、「蜻蛉」はその命の短かさにおいて、大君や浮舟の生のはかなさを象徴するものであつたであらう。

うが、それ以前に「手にはとられず」「ゆくへも知らず消え」去って行ってしまった点において、それは白鳥処女説話における白鳥の「変形」であつたと言ふべきであらう。

「空蟬」に「蜻蛉」。『源氏物語』にあつては、光源氏も薫も、白鳥処女説話の白鳥のように、ともに女に去られてしまふ。しかし、実は薫は、「蜻蛉」と喩えられた宇治大君に対して、「空蟬」に対する光源氏と同じ轍を踏んでいたのである。

すなわち、総角の巻。自らへの薫の恋情を妹中君へ向けさせようとする大君は、寢所へ忍ぶ薫の気配を逸早く察知し、逃れ去つていた。薫は、残された中君を相手に一夜を明かすことになる。「このあたり、空蟬が身を避けたのに似る」(石田穰二、清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語』)。これはまったく、空蟬に忍んだつもりがまんまと逃げられ、継娘軒端萩と契るはめになつてしまつた空蟬の巻の同工異曲である。

人の忍び給へる振舞は、え聞きつけ給はじ、と思ひて、やをら導き入る。

(総角)

火明き方に屏風を広げて影ほのかなるに、やをら入れ奉る。

(空蟬)

うちもまどろみ給はねば、ふと聞きつけ給ひて、やをら起き出で給ひぬ。

(総角)

あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単を一つ着て、すべり出でにけり。

(空蟬)

心ときめきし給ふに、やうくあらざりけりと見る。

(総角)

いぎたなき様などぞ、あやく変はりて、やうく見あらはし給ひて、

(空蟬)

空蟬の巻における光源氏、蜻蛉の巻における薫。『源氏物語』は同じ展開を見せる。『源氏物語』にとって白鳥処女説話がいかに大きな存在であったか、改めて認識を迫られることになるであろう。

『源氏物語』における『長恨歌』の存在の大きさ、ひいてはその深層に見出された羽衣説話の存在の大きさ。それらの根底には、白鳥処女説話への尋常ならざる関心が、さらに斥出されることになる。

「空蟬」にせよ「蜻蛉」にせよ、去って行ってしまった女を喩えるには、飛ぶ虫もまたふさわしい。地上に縛りつけられた人間を尻目に、自在に天空を飛昇して行く、鳥や虫の姿に、人は、追って帰らぬ女性の姿を重ねたのではなからうか。一時自分の元にあると思った女に、突然去られてしまった喪失感、まさに人間の手には絶対に届かぬ空へ飛び立って行った鳥や虫のように、感じられたであろう。

世界に広く分布する白鳥処女説話において、去って行く女が、なぜ白鳥を典型とする鳥の姿に変身するのか、その理由は、去られた男の側の喪失感の大きさに由来すると思われる。忽ちのうちに手の届かぬ所へ行ってしまった女は、自在に羽搏いて飛び去って行く、鳥のように感じられたのではないだろうか。それが白鳥や鶴のように美しい白い鳥であったなら、その喪失感はいよいよ哀切なものとなる。⁽⁶⁾

女が、羽衣を纏った天女であったというのは、その、より人間的な表現であったと考えることが出来る。

注

(1) ただし、この「鶯姫」は、その実ホトトギスであったと思われる。例えば、『了誉序注』に引く竹取説話には、

アル時、竹ノ中ニテ鶯ノ巢ノ内ニ郭公ノ卵ノ一ツ残りタリケルヲ見ツケテ嫗婆ニ云ケルハ、

鶯ノ卵ノ内ノ時鳥者ガ父ニ似テ者ガ母ニ似ズ

ト云歌アリ。イサヤ、郭公ノ鶯ノ腹ニ宿レル子ノ巢立ヲ見ントテ、綿ニクルミツ、^{「トコロ」}懷ニ入テ暖メケレバ、日ヲ重テ卵開テ、中ヨリイタイケシタル人ノ質出タリ。見レバ女子也。

とあり、「鶯姫」は「鶯ノ巢ノ内」の「郭公ノ卵」から孵つたとされる。すなわち、托卵というホトトギスの習性によつて、鶯の巢の中に産みつけられた卵から孵つたのが「鶯姫」だったのである。恐らく、同じ巢の中から親鳥とはまったく似ても似つかぬ別種の鳥が巢立つ不思議が、鳥の巢の中に人間が生まれ得る、という類想を呼んだのであろう（拙稿「熒奕姫と白鳥処女―柳田国男『昔話と文学』覚書」、高木昌史編『柳田国男とヨーロッパ―口承文芸の東西―』参照）。

(2) 「衣服を残して源氏の許から去った空蟬」が白鳥処女（天人女房）型の《発想の型式》から生じたいらしい」（鳥内景二「源氏物語における表現とその基盤―匂宮・空蟬・大君をめぐる―」『国語と国文学』第五十八巻第七号）。

(3) これ以前（帚木）に、空蟬は、
帚木の心を知らで園原の道にあやなく惑ひぬるかな

数ならぬ伏せ屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木

と、「帚木」と喩えられるか、遠くからは見えて近付くと見えなくなってしまうという「帚木」の形象は、その先駆になっていると見ることが出来るよう。

(4) 『竹取物語』では、「かくや姫」が「天の羽衣」に着替えて地上に「脱ぎ置く衣」というのが、これに当るであろう。

(5) 地上に出て数日の命しかない蟬、夕方咲いてすぐに凋む夕顔も同断。

(6) 夕顔の花が白いのも、これに通うかも知れない。「其蔓ごとに真白な清い花、あなたそがれをおぼめくといふ夕方の花を、持つて来て咲かせたのは日本人の巧み、巧みと言はうよりも我が親との、夢を美しくする能力では無かつたか」(柳田国男「天の南瓜」『昔話覚書』)。其六参照。

(付記) 本稿成るに当って、平成二十八年度成城大学特別研究助成を受けた。